



平成28年熊本地震 災害支援ナース活動レポート

平成28年4月14日に発生した熊本地震。福岡県看護協会では、日本看護協会の要請を受け、災害支援ナースを36名派遣しました。災害支援ナースの被災地での活動をレポートします。



■ 平成28年熊本地震発生

4月14日21時26分M6.5(暫定値)最大震度7
4月16日1時25分M7.3(暫定値)最大震度7
地震発生後、福岡県看護協会にて対策本部を設置

■ 災害支援ナース計36名を派遣

活動場所	第1陣 (4/20~23)	第2陣 (4/23~26)	第3陣 (4/26~29)
阿蘇市農業環境改善センター	2名	2名	
阿蘇中学校	2名	2名	
一の宮小学校	2名	2名	2名
南阿蘇中学校(長陽中学校)	4名	2名	4名
宇土小学校	4名	4名	2名
大津町老人福祉センター		2名	
計	14名	14名	8名

●福岡県看護協会災害支援ナース登録者数
249名 98施設(2016年3月現在)

■ 災害看護のポイント“見えない健康問題を予測する”

潜在的な感染症

- ノロウイルス
- インフルエンザ
- 肺炎・食中毒など

免疫力の低下

長引く避難生活

- 不眠・疲労
- 子どもの成長阻害
- 脱水
- 慢性疾患の増悪
- 生活不活発病
- 熱中症など

災害時
要援護者の
増加

持続する余震

- 生活再建の目途が立たない
- 車中泊を継続
- エコノミークラス症候群の
リスク拡大

心身の
疲労蓄積

1 余震が続く中、出発

限られた情報をもとに、より良い支援をするための準備をして被災地へ。“今、私たちにできることは何か”“誰のために、何のために”を繰り返し考えた。



2 当たり前の毎日が、当たり前にできなくなった

教室、廊下、体育館、運動場。夜になると、居場所がなくなるほど避難者でいっぱいになった。産まれて間もない乳児、遊びたい幼児。学校が始まらない小・中学生と高校生。働き盛りの大人、杖・車いす、ベッドが必要な高齢者。家族の一員であるペット…みんなが避難所に集まつた。



4 断水で困ったこと

水が流せないトイレは、匂いが充満する。井戸水を何度も汲んで、トイレを流せるようにした。



5 慣れない仮設トイレ・見えない菌との闘い

和式トイレに、簡易式の洋式トイレを提案し設置した。トイレの後の手洗いは、ため水をやめ、汲み出すようにした。掃除は被災者、支援者が一緒になって取り組んだ。



災害支援を終えて

災害支援ナース 第1陣派遣 久留米大学病院 岡崎 敦子



福岡県看護協会では、過去に新潟県中越沖地震や、東日本大震災で災害支援ナースを派遣した経験がありました。しかし、今回の熊本地震では、大きく3つのことがこれまでの派遣と異なっていました。

まず1つ目は、災害支援ナースの一人ひとりが、研修で学んだ“知識”と現地で目にした“現状”をつなぎ合わせ、より効果的な支援へと発展させることができた点です。

災害支援ナースは、1つの避難所に2名～4名ずつに分かれて配置され、24時間体制で現地の看護職や被災された方々に支援を行いました。「組織的な動きがスムーズにできないこと」や、「いつもと少し違う自分」を感じながら、自分たちで考え行動することが求められました。ストレスフルな状況にも関わらず、それぞれのチームが、被災者の視点に立った看護を実践することが出来ていました。これは、災害支援ナース養成やフォローアップ研修を通じて、毎年計画的に行ってきました教育の成果です。

2つ目に、避難所の生活に視点を置いて、避難所のアセスメント

を行った点です。災害支援ナースは、避難所の環境を迅速かつ客観的に把握し、生活の中で起こる看護問題を探り、具体的な計画と実践へつなぎました。また、後方支援を行う、看護協会とも避難所の情報を共有し、必要な支援を考えました。被災地の中にいるからわかること、被災地の外から客観的データとして読み取れることがあり、シームレスな活動へつながったと思います。

3つ目は、福岡県看護協会としての派遣体制を強化できた点です。第1陣から第3陣まで計36名を派遣するために、協会の職員が総動員で派遣の準備や調整に、必死でご尽力下さいました。これは災害支援体制の基本である「CSCATT™」の初めの「C」Command & Control(指揮命令系統の確立)ができた結果であり、支援を行う上で最も重要な点でした。派遣された人以上に、送り出す人の結束力も必要でした。

最後に、今回の派遣を通して、“支援”とは助言や指導ではなく、被災地の手となり、寄り添い、共に活動することだと再認識しました。看護の原点に立ち返り、いのち、暮らしを支えるとは何か、今後も災害支援ナースの仲間とともに探究していく必要があると考えています。

※災害医療実施のための体系的アプローチ(CSCATT™)とは、多数傷病者発生事故に医療機関が対応するための戦術的アプローチを示したもの。7つの基本原則に要約される。Command&Control/Safety/Communication/Assessment/Triage/Treatment/Transport

3 「衣・食・住」を整える

着替えが無い、哺乳瓶が洗えない、野菜が食べたい。普段通りにできないことがたくさんあった。支援物資を整理し、プライバシースペースを確保した。



6 「エコノミークラス症候群」ってなあに?

テレビや新聞で、何度も取り上げられていた“エコノミークラス症候群”。詳しいパンフレットがあっても、本質は伝わっていかなかった。中学生と一緒に、ポスターを作成し、校内放送を使って、毎日運動を促した。



無事に帰還。そして、様々な思いが込み上げてきた。

無事に帰ってきた安堵感。活動を思い返すと、できしたこと、できなかったことが見えてきた。送り出してくれた所属施設や県協会の方々の“見えないサポート”に心から感謝。



(記:久留米大学病院 岡崎 敦子)

災害支援ナースの声

災害の現場で見たこと、感じたこと

第1陣 飯塚病院 竹中 久美

熊本地震発生後、福岡県看護協会の災害支援ナース14名は、4月20日(水)～4月23日(土)、第1陣として5カ所の避難所に派遣されました。

私は熊本県阿蘇市の避難所で支援活動を行いました。避難所には施設内と車中泊を含め約1,000名の方が避難されており、市役所の職員と自衛隊が24時間交代で運営されていました。避難所の方々が安全で安心な生活を送れるよう、活用できる資源は何か、私達に出来ることは何かを考えました。廊下に置かれた支援物資を使用頻度や効率を考え整理したり、仮設トイレは段差があり杖歩行の高齢者には転倒の危険がある為、水洗トイレの設置を検討したり、ノロウイルス感染予防のためボランティアと協

力してトイレ掃除を行いました。また吐物処理の物品を揃え、拡散を防ぐ処理の方法を市職員へ指導しました。

「看護師さんが来てくれて安心」「ありがとう」の言葉をいただき、私達の存在が避難者の安心につながっている事を実感し、やりがいを持って活動を行うことができました。



第2陣 小倉記念病院 江草 真紀

福岡県看護協会より4月23日(土)～26日(火)、災害支援ナース第2陣14名のリーダーとして熊本地震の支援へ向かいました。

第2陣は「辛い時こそ笑顔で、チーム一丸となって頑張ろう」をスローガンに、派遣を無事終えて笑顔で帰還する事を目標に出発しました。

私は指定避難所の一の宮小学校へ派遣となり、多い時で体育館・校舎側合わせ600人以上の避難者の方がいました。地元の保健師も被災者である中、活動をされており、休息をとつてもう為にも日中は地元の保健師が、夜間帯は災害支援ナースが一つのチームとして被災者を24時間見守る体制を引き継ぎました。

バディーと共に多くの不安を抱えた被災者一人でも多くの人に

声をかけようとラウンドした事、医師が常駐していない為、限られた医療器具の中、私達の判断で救急搬送を行った事等、活動を見てくださっていた被災者の方から「夜間も見守る支援ナースがいることに初めて安心して眠ることができた」と言葉をもらいました。



第3陣 戸畠共立病院 山元 真由美

第3陣計8名は、3ヶ所の避難所で活動することになりました。

主な業務内容は、感染症患者の保護・拡大防止・清掃・巡回・夜間急変時の対応等で、行政や日赤の方とコンタクトをとり、行ってきました。業務自体は、先陣の方々が確立してくれており、トラブルなく、円滑に遂行出来ました。特にチームワークに心がけ、頻回なミニカンファ・自由時間を設け、ストレスを溜めこまないよう配慮しました。東京からみえる第4陣とは直接会えなかった為、伝達ノート作成に力を入れ、荷物整理をして帰福の途につきました。被災して大変なのに「看護協会には頭が下がります」と声をかけてくださったり、ペットがいるためテント生活している方が運搬を手伝ってくれたり、

他人を思いやる気持ちに、バスの中で涙が溢れました。この経験を無為にせず風化することなく、報告会等で伝えたいと思っております。そして1日でも、早い復興を願っております。



災害支援ナース一同、今回の支援活動を理解し、送り出していただいた上司や病棟スタッフに心から感謝いたします。
まだ余震が続いておりますが、熊本の皆さまの笑顔と1日も早い復旧・復興をお祈りいたします。